

◆プラスチック難燃剤や触媒などに使われる三酸化アンチモンの原料である地金の動向について。

「主要生産国の中国の輸出規制で地金の国際相場は急騰したが、同国国外での鉱石の採掘や地金の製錬が増えたことで2025年4～6月期をピークに下落基調で推移する。国際相場は中国の国内相場との内外価格差が解消するところで落ち着くというのが大半の見方だ。中国では太陽光パネル向けの需要もあり、国際相場が以前のように1～数千ドル台まで落ちることとはなく、2万ドル台を維持するのではないかと」

「販売面では製造業全般の生産がやや軟調で、

2026 展望

トップインタビュー

三酸化アンチモンの価格上昇を受けて代替品への切り替えなどもみられた。地金価格の乱高下が落ち着けば販売数量も持ち直すと期待している」

◆国際情勢に左右されるなかで三酸化アンチモンの供給を継続ししました。

「顧客に迷惑をかけることを最優先に考え、中国以外の原料調達先の

日本精鉱

植田 憲高 社長



内だけでなく海外の需要も取り込んでいく」

◆金属粉末事業の状況はいかがでしょうか。

「ランプ関税の影響もあつて25年度の前半は荷動きが芳しくなかったが、後半に入り右肩上がりできている。電子部品向け金属粉末は民生用途が例年1～3月期に不要期に入るが、生成AI（人工知能）サーバー関連の需要が伸びており、季節要因が薄れつつある」

確保や低品位原料の『使いこなし技術』を磨いてきたことが有事に生き残る。世界を見渡すと三酸化アンチモンの供給が不足する国・地域は残る。メーカーが限られるなか

で、当社にも世界各地から多くの引き合いがある。生産拠点の中瀬製錬所（兵庫県養父市）で合理化・省人化投資を進める計画だ。三酸化アンチモンが主流で顧客ごとの

カスタマイズが求められる。顧客の要求特性に合った製品を率先して開発できるように、子会社日本アトマイズ加工では金属ペーストなどの川下技術も含めた研究開発に取り組んでいる。電子部品の軽薄短小化に追従する微細化への対応と収率を両立させる生産技術開発にも力を注いでいる」

◆25～27年度の中期経営戦略で掲げる新事業創出に向けた足取りは。

「25年4月に発足した技術開発部で開発中の金属粉末の技術を生かした新製品の開発や既存製品のブラッシュアップに向けた技術交流を実施している。経営の安定性向上に向けて第三、第四の柱を

記者の視点 25年の創業90周年を経て100周年に向けてスタートを切った。植田社長は「次の10年は国際情勢も含めて大きな変化が予想される。市場環境が大きく変動しても影響を受けないメーカーを目指す必要がある」と話す。三酸化アンチモンの中国発ショック下で安定供給力を発揮したが、今後も「さまざまな施策を講じ盤石な経営基盤を構築する」と力を込める。

競争力高め海外需要開拓

「25年4月に発足した技術開発部で開発中の金属粉末の技術を生かした新製品の開発や既存製品のブラッシュアップに向けた技術交流を実施している。経営の安定性向上に向けて第三、第四の柱を」

（小林徹也）